

4－6 小野原遺跡群出土の土器

弘中正芳

はじめに

阿蘇谷に所在する弥生時代後期の集落遺跡として、下山西遺跡や狩尾遺跡群などが挙げられる。これらの遺跡では、竪穴住居跡などから良好な状況で出土した一括資料の型式学的な検討、遺構の切り合い関係などにより、それぞれの遺跡における土器編年が検討されている（高谷編1987、木崎編1993）。また、これらの成果と白川下流域の遺跡における成果を総合した上で編年も行われている（河森1998）。

下扇原遺跡と小野原A遺跡では、両遺跡を合わせると100基以上の竪穴住居跡が発見されている。調査区内からは、多くの土器が出土した。甕が多く、そのほとんどは脚台が付く。また、線刻絵画土器、免田式土器、全面を重弧文で飾った把手付壺なども出土した。その他にも数は多くは無いが、脚付短頸壺や片口土器など、弥生時代後期の器種組成を考えうえて重要な資料も出土している。さらに、いくつかの竪穴住居跡からは、一括資料と考えられる土器群が出土した。これらの一括性が高い土器群は、複数の時期に分けることが可能である。そこで、本論では竪穴住居跡から良好な状態で出土した土器群を利用し、当遺跡における編年を検討する。器種構成、形式的な変遷から複数の段階を設定し、各段階における特徴を考察する。

なお、文中および図中の番号は、第2章及び第3章の土器番号（RP）を用い、小野原A遺跡出土土器には番号頭に「A」の文字を付した。

1 土器の分類

まず、小野原遺跡群から出土した土器の分類を行う（Fig.6－1）。主な器種は、甕、壺、高杯、鉢である。

1－1 甕

胴部最大径の位置や底部の形態などにより、3つに大別することが可能である。1つ目は、胴部最大径を口縁部の近くにもつもので、これを甕A類とする。続いて、胴部最大径が中位または中位よりやや上にあり、短脚のものが挙げられる。甕B類とする。甕C類は、胴部最大径が中位にあり、長い脚部がつけられる

ものである。

1－2 壺

直口壺・複合口縁壺・長頸壺・短頸壺に大別し、それぞれを口縁部や胴部などの形態で細分する。

直口壺

長胴の壺である。口縁部が大きく外反する直口壺A類と、直線的に立ち上がるB類に分類出来る。

複合口縁壺

口縁部の断面形が三角形を呈するものを複合口縁壺A類とする。複合口縁壺Aは、肥後型複合口縁壺とも呼ばれる（武末1982）。口縁部が内傾外反し、波状文を施す壺を複合口縁壺B類とする。複合口縁壺B類は、一般的に安国寺式土器と呼ばれる。

長頸壺

3つに細分される。球形に近い胴部に、外反する口縁のつく中型のものを長頸壺A類とする。長頸壺B類は小型の壺で、扁平な胴部をもち、口縁部はやや直線的に立ち上がる。長頸壺C類は、そろばん玉状の胴部をもち、胴上半部に重弧文がつくもので、いわゆる免田式土器である。

短頸壺


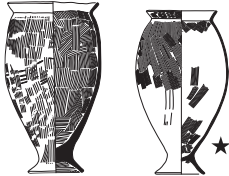
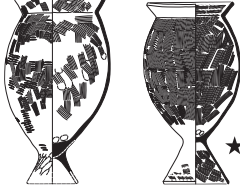
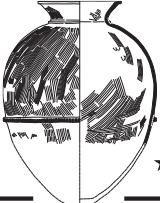

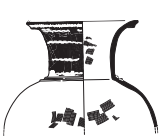
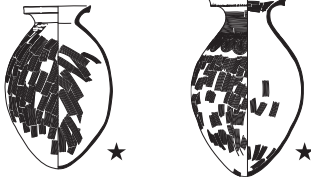









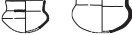





胴部形態により2つに分ける。球形に近い胴部をもつものを短頸壺A類とし、胴部が扁平なものを短頸壺B類とする。短頸壺の中には脚部が付けられるものもある。

1－3 鉢

碗形を呈するものを鉢A類とし、丸い底部から垂直に立ち上がる口縁部を持つものを鉢B類とする。扁平な胴部から屈曲して立ち上がるものを鉢C類として設定する。また、A類に脚台が付くものをD類とする。

1－4 高杯

全形の分かる資料が少ないため杯部の形態で分類する。浅い杯部の上に、直立気味に立ち上がりながら外反する口縁部がつくものを高杯A類とする。高杯B類は、浅い杯部に水平気味に外反する口縁をもつものである。

甕	 A 類	 B 類	 C 類
直口壺	 A 類	 B 類	
複合口縁壺	 A 類	 A 類	 B 類
長頸壺	 A 類	 B 類	 C 類
短頸壺	 A 類	 B 類	 C 類
鉢	 A 類	 B 類	 C 類
高杯	 A 類	 B 類	
その他	 ジョッキ形土器	 小型尖底土器	 片口土器

★ Scal=1/20、無印 Scal=1/16

Fig.6-1 土器分類図

1-5 その他

その他の器種としてはジョッキ形土器、小型の尖底土器、ミニチュア土器、片口土器などがみられるが、これらは細分できるだけの資料が無い。

2 竪穴住居跡の出土資料

今回、検討の対象としてとりあげる竪穴住居跡出土の資料の概略を紹介する。下扇原遺跡の1区から順に遺構の番号に従い記述する。

2-1 下扇原遺跡1区

SB4

甕が26点出土しているが、全形の分かる資料は少ない。完形の103・104はともにB類である。底部片10点のうち、短脚と考えられるものが9点で、長脚のもの(101)は1点である。直口壺は、口縁部ではA類(68・70・72)とB類(69)がともに存在するが、A類が多い。胴部は長胴で、底部は丸底である。短頸壺(56)は、やや肩の張る胴部をもつ。58は、脚台をもつ短頸壺であり、胴部中位で強く屈曲している。鉢はA類(57)とD類(59)が認められる。59は、杯部が直線的に開き、上位で立ち上がっている。高杯はA類とB類である。A類(63~67)は、杯部外面に丁寧な放射状のミガキが施され、口縁部には波状の暗文をもつものが多くみられる。また、ジョッキ形土器(55)が1点出土している。

SB7

出土土器の多くは甕のC類であるが、一部B類を含む。直口壺はA、Bともにみられ、どちらも胴部最大径が中位にある。また、頸部の下に刻み目突帯をもつものもみられる(127)。複合口縁壺A(127)は、口縁部の下端に刻み目を施す。長頸壺は、B類・C類である。高杯はA・B類である。128は鉢A類と考えられるが、口縁部は内湾する。他には、ジョッキ形土器(123)、片口土器(129)が出土している。

SB11

甕の全形が分かる資料は無いが、脚部の形態から考えて、B類とC類がともにみられ、ややC類が多い。

直口壺A類(176)は胴部最大径が中位にあり、頸部下には太い突帯が貼り付けられ刻み目が施されている。複合口縁壺A類(171)は口縁部の上下端に刻み目が入れている。長頸壺B類(166)、C類(173)と思われる。短頸壺(163、164)はB類である。小型の尖底土器(156)、ミニチュア土器(157)がみられる。

2-2 下扇原遺跡2区

SB28

出土した甕の中で全形が分かるものはB類(267)である。しかし、C類(269)も看取される。直口壺はA類(254)で、頸部下に断面三角形の突帯を付す。長頸壺A類(252)、B類(253)は頸部下に櫛描き波状文をもつ。短頸壺は口縁部を欠損するが、A類である。高杯はA類で、文様などはみられない。

SB30

甕はすべてB類である。直口壺(274)はA類で、全形は不明である。複合口縁壺A類(275)は、直線的に立ち上がった後大きく外反する口頸部をもつ。口唇部の上下端に刻み目が施され、頸部下には2条の断面三角形の突帯が貼り付けられている。高杯は、脚部のみの出土のため全形は不明である。

2-3 下扇原遺跡3区

SB45

甕の全形をうかがえる資料は無いが、脚部形態から判断するとC類である。349は非常に長い脚部をもつ。壺類も、全形の分かる資料は無い。短頸壺はA類(334)とB類(335)ともにみられるが、両者とも胴部の屈曲が強く、屈曲部には明瞭な稜線が入る。

SB48

完形の甕(381)はB類である。しかし、脚部の中には長いものも含まれており、C類と判断される。直口壺は口縁部のみの出土の為詳細は不明である。複合口縁壺B(363)が出土している。長頸壺A類は口縁部に刻み目を施す。長頸壺B類は、胴部の屈曲が強いもの(358)と下膨れの胴部を呈するもの(359)の2

者がある。鉢（353）は内湾する口縁部をもつ。小型の尖底土器が2点みられる。

SB53

甕はB類が認められる。直口壺（396）はA類である。長頸壺はA類（395）とB類（397）であると考えられる。短頸壺（400）はA類で、凸レンズ状丸底をもつ。鉢A類（390・391）は、やや内湾する口縁部をもつ。高杯の脚部が出土しているが、形態は不明である。

2-4 下扇原遺跡4区

SB84

甕の脚部は短脚、長脚の両者がみられる。壺は、口縁部のみ、または胴部のみ破片が多く、詳細は不明である。直口壺A・B類の口縁部、長頸壺C類と考えられる胴部（507）が認められる。短頸壺（505、506）は丸い胴部をもつと考えられる。高杯（519）はA類がみられ、内面に放射状のミガキが施される。鉢（503）はA類で、丸底である。また、小型の甕もみられる（504）。

SB86

甕の脚部はB類、C類どちらも含んでいる。長頸壺B類と思われる口縁部片と胴部片が出土しているが、明言は出来ない。短頸壺（540）はB類である。また、ジョッキ形土器の破片（536）と、小型尖底土器の底部（537）がみられる。

2-5 下扇原遺跡5区

SB108

出土した甕は脚部が長く、C類である。635は、当初は脚台が付けられていたが、その脚部を折って使用されたようである。直口壺は、A類（627）とB類（626）があり、ともに頸部下に突帯が貼り付けられている。長頸壺B類と考えられる胴部片があり、上位に櫛描き波状文が施される。高杯（621）はA類で、文様は無い。鉢は、A～C類全てがみられる。ジョッキ形土器（620）と、くびれ部が上位にある器台と思われる破片（625）が出土している。

SB110

甕は長脚で、非常に長いものも含まれる（656、657）。直口壺（643）は、長胴で直線的に立ち上がる口縁をもつ。長頸壺B類（644）はやや下膨れな胴部であり、上位には櫛描き波状文を施す。鉢（640）はやや内湾する口縁をもつ。小型尖底土器が出土している。642は、小型尖底土器と近い形を呈しているが、脚台の付くものと思われる。外面には、線刻絵画が描かれている。

2-6 下扇原遺跡6区

SB150

甕の全形がわかる資料は出土していないが、脚部は短い。直口壺A（743）は、口縁部が強く外反し、頸部下に断面三角形の突帯が付く。胴部は肩の張る長胴で、中位に刻み目を入れた突帯を貼り付けている。また、752や753の様に長胴で胴部突帯をもたないものも認められる。底部は平底、または、凸レンズ状丸底である。長頸壺A類（744）は大きく外反する口縁部をもち、頸部下には三角突帯が付く。胴部はやや肩が張る球形の胴部で、底部は凸レンズ状丸底である。短頸壺（745）は、球形の胴部をもち、平底である。鉢D類（741）は、椀状の杯部にやや太目の脚部が付く。

SB152

出土した甕の多くはC類だが、胴部最大径の位置がやや高く、短い脚部が付くB類のもの（770、774）も含まれている。直口壺のA類はやや肩の張る長胴で、B類は胴部最大径が中位にある。底部はどちらも丸底に近い。長頸壺A類（757）の口縁の外反は弱い。胴部はやや肩の張る器形で上位には櫛描き沈線文が施される。短頸壺（758）は、球形の胴部で丸底である。高杯（756）はA類で、内面には放射状の暗文が施される。外面はハケメによる仕上げでミガキなどを行われていない。鉢（755）は半球形を呈し、底部は丸底に近い形であると考えられる。

SB165

甕はC類である。直口壺は口縁の外反が少し弱く、胴部は球形胴に近い。長頸壺は小型でB類である、胴

部の上位に櫛描き波状文がわずかに残っている。

2-7 小野原A遺跡1区

SB16

甕の口縁部から胴部の約2/3が残存している。胴部最大径は口縁部付近にあり甕A類である。短頸壺は扁平な胴部のB類で、平底である。

SB96

甕は出土していない。短頸壺のA類(A7)とB類(A6)が1点ずつみられる。A7は鋤形の口縁で球形の胴部に平底が付く。壺と思われる口縁部がみられるが、全形は不明である。

2-8 小野原A遺跡2区

SB222

C類に属すと思われる甕が出土している。複合口縁壺A類が2点みられ、頸部に列点文をもつものともたないものがある。

2-9 小野原A遺跡5区

SB1217

大量の土器が完形またはそれに近い状態で廃棄されており、中でも複合口縁壺A類の出土が目立つ。住居の廃絶時にまとまって廃棄された可能性も考えられる。甕は、非常に長い脚部を有し、胴部にタタキ目を残すものもみられる(A78、A76)。直口壺は、直線的に外側にひらく口縁をもつ。胴部は長く、やや倒卵形を呈す。複合口縁壺A類も倒卵形の胴部をもち、胴部上半から頸部にかけて文様をもつものも多い。長頸壺(A43、A44)は、扁平な胴部のB類で、頸部中位と下位に多状の三角突帯をもつ。短頸壺(A41)はやや扁平な胴部で、屈曲が強い。高杯(A42)はB類に近いが、杯部が深く大きく外側にひらく口縁部をもつ。鉢(A40、A39)は、口縁部が内湾するが、やや扁球形を呈する。

2-10 小野原A遺跡6区

SB3513

甕が出土している。A84は、鋤形に近い口縁部をも

ち、口縁部の下には断面三角形の突帯が貼り付けられている。胴部最大径は口縁部付近にあり、A類である。底部形態は不明である。

3 時期の検討

ここでは、上述した竪穴住居跡出土の資料をいくつかの土器群に分類し、その器種構成などの特徴を検討する。その後、既存の編年と対応させつつ土器群間の前後関係を考える。

まず、竪穴住居跡から出土した資料のうち、良好な一括資料と考えられるものから5つを抽出し、それぞれを土器群として設定した。

3-1 土器群の抽出

第1群

第1群は、一つの遺構のみで土器群として設定できる一括資料がない。そのため、小野原A遺跡1区SB16やSB96、6区SB3515出土の土器群を合わせて第1群として設定する。甕はA類のみである。甕口縁部の断面形は鋤形、またはく字状を呈する。底部形態は不明だが、短い脚台が付くものと考えられる。その他の器種は、短頸壺A、B類があり、いずれも平底である。

第2群

第2群として、下扇原遺跡6区SB150から出土した土器群が指摘できる。甕の全形が分かる資料は出土していないが、底部は短脚である。断面鋤形の口縁部に加えて、屈曲の鋭いく字状の口縁部が1点ずつ認められる。直口壺はA類で、肩の張る胴部または最大径が中位にある長胴をもつ。直口壺と長頸壺A類の底部は平底、または丸底に近い平底であるが、短頸壺の底部は平底である。鉢はD類のみであるが、杯部は半球形に近い碗状を呈する。

第3群

第3群は、下扇原遺跡1区SB4から出土した土器があてはまる。甕はB類が主体であり、わずかにC類を含む。直口壺はA類が多くみられるが、B類も出現している。長い胴部と凸レンズ状の丸底をもつ器形を呈する。短頸壺A類は不明である。短頸壺B類は肩の張

Tab.6-1 器種組成の変化

段階	遺構数	甕			直口壺		複合口縁壺		長頸壺			短頸壺		鉢				高杯		ジョッキ形土器	尖底土器	その他
		A	B	C	A	B	A	B	A	B	C	A	B	A	B	C	D	A	B			
1 段階	8	○			○							○	○									
2 段階	3	△	○		○				○			○	?	?			○					
3 段階	10		◎	△	○	△	○		?	○		○	○	○			○	○	○	△		脚付短頸壺
4 段階	34		○	◎	○	○	○	△	○	○	△	○	○	◎	△	△	△	◎	○	○	○	片口土器
5 段階	10		△	◎		◎	◎			○		△	△	○		△			○		○	絵画土器

る胴部をもつものと、中位で強く屈曲するものがみられる。鉢は、A類とD類が認められる。半球形を呈するものと直線的に開くものがあり、後者は高杯に近い形態をしている。高杯はA類、B類ともに存在する。A類は杯部外面に丁寧なミガキ、口縁部外面に波状暗文を施す。また、ジョッキ形土器も認められる。

第4群

下扇原1区SB7出土の資料を第4群とする。出土した甕の多くはC類だが、B類も少し含まれている。直口壺のA類、B類はともに胴部最大径が中位にあり、底部は丸底に近い。複合口縁壺A類は、口唇部下端に刻み目をもつ。長頸壺B類の全形は不明である。長頸壺C類は完形で出土した。短頸壺は、縦長の胴部に丸底がつく。鉢A類の全形は不明であるが、口縁部は内湾する。高杯はB類で、内外面ともハケメまたはナデで仕上げられており、ミガキなどは行われていない。また、片口土器が1点出土している。同様な土器が、蒲生・上の原遺跡の11号住居から発見されており（木崎編1996）、この土器にも短い脚台がつくものと考えられる。

第5群

小野原A遺跡5区SB1217出土の土器を第5群として抽出した。甕は、C類である。非常に長い脚部を有し、胴部にタタキ目を残すものもみられる。直口壺はB類がみられる。胴部が長く、やや倒卵形を呈す。複合口縁壺A類も倒卵形の胴部をもち、胴部上半から頸部にかけて文様をもつものも多い。長頸壺は、扁平な胴部のB類で、頸部中位と下位に多状の三角突帯をもつ。

短頸壺はやや扁平な胴部で、屈曲が強い。高杯はB類である。鉢はA類で、口縁部が内湾し、やや扁球形をなす。

3-2 土器群の前後関係

次に、第1群から第5群までの前後関係を検討する。

熊本県内における弥生時代後期土器の編年は、甕の長胴化に伴う胴部最大径の位置や脚部の形態、器面調整の方法などを基準として考えられることが多い（高木1979ほか）。まず、胴部最大径が口縁部付近にあるものから、胴部中位付近に最大径をもつものへと変化する。また、底部の形態は、中期段階の土器である黒髪式土器の名残を残した短めの脚部から、次第に長脚化し、最終的には丸底化することが知られている。長脚化が進む一方で、胴部外面の調整技法も変化する。すなわち、後期前半段階では甕の外面はタタキをハケメで消すが、後の時期になるとタタキ目をそのまま残すものも出現する。これらの甕の形態変化を考えると、前述の器種分類ではA類→B類→C類という変化の方向が考えられる。しかしながら、その変化は急激に進むものではなく、極めて漸進的なものであることも指摘されている（木崎1993）。そのため、それぞれの型式が、比率を変えつつ徐々に変化するものと考えられる。

以上のことを考えると、甕A類のみをもつ第1群が、もっとも古い段階であることが伺える。次に、甕A類とB類が共伴する第2群がそれに続くと考えられる。第3群は甕B類が主体でわずかにC類を含み、第4群でその比率は逆になる。また、第5群ではB類がみられない。これらのことから、第1群→第2群→第3群→第4群→第5群という変化の方向が想定できる（Fig.6

－2)。そこで、以下では、土器群をそれぞれ1段階・2段階・3段階・4段階・5段階と呼び替える。同時期と考えられる他の遺構の土器を用いて、各段階における器種組成と器種ごとの形態を述べる。なお、Tab.6－1は、各段階での器種組成を示したものである。

1段階

1段階に属する遺構は、堅穴住居跡6基・土壇2基である。甕A類、直口壺A類、短頸壺A類・B類が存在する。甕の口縁部は鋤形、またはく字状を呈する。底部形態は不明だが、短い脚台が付くものと考えられる。短頸壺はいずれも平底で、中期段階の名残を残している。また、小野原A遺跡2区SK131出土の壺（A33）も、当段階のものであると考えられる。出土した器種が少ないため、全体的な器種組成はつかめなかったが、甕、壺ともに中期的な様相を色濃く残す段階である。

2段階

2段階は、3基の堅穴住居跡が該当する。甕A・B、直口壺A・B、長頸壺A類・短頸壺A類・鉢D類が認められる。甕の底部は短脚である。断面鋤形の口縁部（A類）がわずかにみられるが、屈曲の鋭いく字状の口縁部（B類）が主体である。また、短頸壺A類は平底であり前段階の様子と共通する。しかしながら、底部がやや丸底化する長頸壺Aや、肩の張る大型の胴部を持つ直口壺などの様に、新出の要素も少なからずみられる。鉢は確認できるものはD類のみであるが、やや浅い碗状を呈する。この段階では、中期的な様相を残しつつ、丸底をもつ壺といった新たな特徴をもつ土器がみられるようになる。

3段階

3段階に属すると考えられる住居は9基土壇1基が該当する。上述したSB4の他は、下扇原遺跡2区SB30、3区SB53、6区SB156から出土した土器などが当てはまる。甕B・C類、直口壺A・B類、複合口縁壺A類、長頸壺A・B類、短頸壺A・B類、鉢A・D類、高杯A・B類、ジョッキ形土器で構成される。甕はB類がほとんどである。直口壺A類は、長い胴部と丸底をもつ器形に変化している。短頸壺B類は、肩の張る胴部をもつもの

と、中位で強く屈曲するものがみられる様である。新たな器種として、複合口縁壺A、長頸壺B、高杯A・B類、ジョッキ形土器が成立している。複合口縁壺A類は、白川水系型（島津1983）とも呼ばれ、白川流域において特徴的な土器であるとされている。この時期の複合口縁壺Aは、口縁部が大きく外反する。文様は少なく、口縁部の上下に施される刻み目と頸部下の2条の突帯だけである。高杯のA類は内外面にミガキを施すといった様に全体的に丁寧に作られており、口縁部外面には波状暗文が付されている。甕の長胴化が進み胴部最大径は中位に来るが、底部は短脚である。一方で、壺の底部は丸底になる。そして、複合口縁壺A類や高杯A・B類、ジョッキ形土器といった新たな器種が成立する。以上が当段階の特徴と言えよう。

4段階

4段階に属すると考えられる遺構は多く、堅穴住居跡30基、溝1基、土壇3基の計34基である。代表的なものは下扇原1区SB7・SB11、2区SB28、3区SB48、4区SB86、5区SB108、6区SB152・SB165などである。甕A類を除くすべての器種が揃うのがこの段階である。甕は短脚のものと長脚のものが共に存在する。また、脚部を欠損した後、再加工して使用したと思われる甕もみられる。直口壺は、3段階のものからあまり変わっていない。複合口縁壺Aは、口縁部の上下に荒い刻み目をもつもの、下端のみに刻み目をもつものがみられる。一方で、安国寺式土器の名称で知られている複合口縁壺B類が出現する。長頸壺A類は小型化し、胴部上位の櫛描き沈線文が増加する。また、扁平な胴部をもつB類や、免田式土器と呼ばれるC類が新たに登場する。短頸壺では、長胴化するA類や、頸部の非常に短いB類が観察される。鉢A類は、半球形のものに加えて口縁部が内湾するものが出現する。また、鉢B・C類がみられるようになる。高杯は、A・B類ともにみられる。しかしながら、高杯A類の外面上におけるミガキや波状暗文がみられなくなり、前段階のものと比べて調整の粗略化が進んでいる。ジョッキ形土器が引き続きみられるが、新たに小型の尖底土器や片口土器、ミニチュア土器、器台が出現する。4段階の特徴をまとめると、長脚甕の出現、壺や鉢における器種の

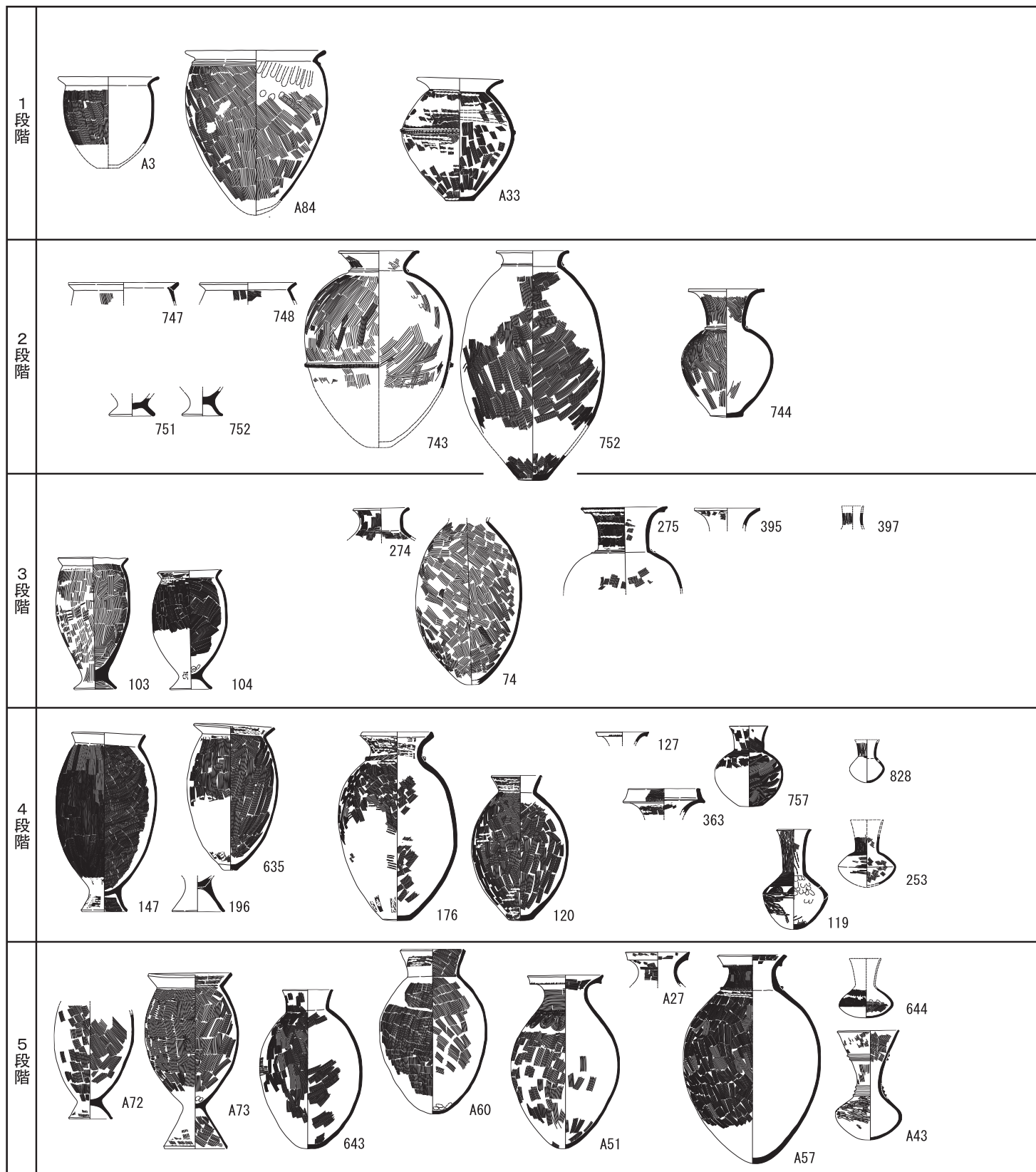
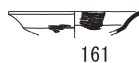
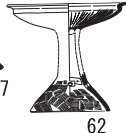


Fig.6-2 小野原遺跡群出土土器編年図 (1)



多様化、免田式土器や安国寺式土器といった他地域に特徴的な土器の存在、小型尖底土器の出現という4つの要素が考えられる。

5段階

5段階には、9基の竪穴住居と1基の土壇が該当する。下扇原遺跡3区SB45、5区SB110、小野原A遺跡2区SB222などが挙げられる。甕C類、直口壺B類、複合口縁壺A類、長頸壺B類、短頸壺A・B類、鉢A・C類、高杯B類、小型尖底土器が認められる。甕はC類が主体である。非常に長い脚台をもち、外面のタタキ目を消さないものも少なくない。直口壺は、ほとんどが直線的に立ち上がる口縁を持つもの（B類）である。複合口縁壺A類は、口縁部が肥厚しており、器形や文様によって細分が可能である。長頸壺は、扁平な胴部に大きく外にひらく口縁部が付き、頸部中位や下位に多条の突帯をもつものが出現する。短頸壺は、胴部中位で強く屈曲するものと、非常に扁平で屈曲の強い胴部を持つものに分かれる。高杯は、B類以外出土していない。杯部が深く、口縁部は外側に向けて大きくひらく。鉢では、A類は基本的に口縁部が内湾する。B類はみられず、C類は立ち上がりの屈曲が弱くなっている。小型尖底土器は、短い脚台が付き、線刻絵画が描かれるものがみられる。当期における特徴は、甕の長脚化が顕著になる、複合口縁壺の多様化、高杯がB類のみになる、などの点が挙げられる。

4 土器の特徴

つづいて、器種ごとの特徴や変化をまとめる。その際、竪穴住居跡以外から出土したものも含めて、特徴的な土器についても触れる。

4-1 器種別の検討

甕

甕は、長短はあるが基本的に脚台のつくものである。これは、熊本県内の弥生時代後期の遺跡で一般的にみられる傾向である。その変化の方向は、長胴・長脚化、調整の粗略化で捉えることが可能である。すなわち、長胴化に伴い胴部最大径の位置が下がったことでA類からB類へと変化し、脚台が伸びることでB類

からC類へと変化している。また、時期が下るにつれて、外面のタタキ目をハケメなどで消すことも少なくなっていく。

壺

長胴化という変化の方向性は、壺系土器にもみることができる。また、底部をみると、当初は中期の様相を残す平底であったものが、徐々に丸底化していく傾向が伺える。直口壺は、曲線的に外反する口縁から直線的に開く口縁部へと変化する。また、肩の張る胴部から中位に最大径をもつ胴部へと変わる。複合口縁壺A類や長頸壺A類は、上位で曲線的に大きく開く口縁から、直線的に開く口縁へと変わる様子が伺える。長胴化に伴って、頸部と胴部の境が曖昧になる。一方、装飾面では、頸部下の突帯程度であったものが、頸部から胴部上半にかけて櫛描き文を施すようになる。この多飾化する傾向は、甕が粗略化するのとは反対の方向性を示している。

鉢

鉢A類は、浅い碗状のものから次第に深くなり、口縁部の内湾するものへと変化する。

また、D類も同様の変化を示す。分量の増加を意図した結果、このような傾向が現れたとも考えられる。

高杯

高杯をみると、徐々に杯部が深くなる様子が伺える。これは鉢と同様の変化の方向性を示唆している。また、高杯A類は、3段階では外面に丁寧なミガキや波状暗文を施すが、次の段階では外面をハケメまたはナデのみで調整するようになる。これは、粗略化の傾向を示すものと考えられる。

4-2 その他の土器の検討

長頸壺C類

下扇原遺跡1区SB7、SB11、4区SB85からは、胴部上半に重弧文を施す長頸壺C類が出土した。また、SB84からは、重弧文はもたないが同様な器形の土器が出土した。SB7から出土した壺は、ほぼ完形である。胴部上位に20条の平行する沈線文を施し、中位に7個

の重弧文を描く。SB11出土資料は、胴屈曲部に刻み目が施され、その上から重弧文が描かれている。小片のため、全形は不明である。SB85から出土した胴部片には、下向きの重弧文が2段に描かれている。2段の重弧文をもつ壺が下山西遺跡から発見されている(高谷編1987)。下山西の例と同様な器形とも考えられるが、小片のため断定はできない。SB84から出土した土器(507)は、そろばん玉状の胴部を呈し、胴部上半に平行する沈線文を施すが、重弧文をもたない。これは、「一般に存在する土器に重弧紋様帯が配された場合に免田式土器が成立する」という宮崎氏の見解を借りれば、免田式土器と成りえなかった土器ともいえる(宮崎2001)。

線刻絵画土器

下扇原遺跡5区SB110から、線刻絵画土器が出土した。小型尖底土器と似た器形を呈するが、低い脚台が付くものと考えられる。胴部上半に2条の上向き弧線が描かれており、一部のみ3条である。3条線の下2条間には、斜線が施されている。口縁部を欠損するため全体の図象は明らかではない。しかし、線刻は器周全体に及んでおり、2本の線刻が蛇行している様にもみえる。また、部分的に施される3条線と斜線が鰭を表したものとすれば、この線刻画は龍を表現したものとも考えられる。

把手付壺

小野原A遺跡調査区北端の落ち込みから出土した土器に、把手付壺がある。

胴部にミガキを行った後、重弧文と横位の直線文を器面全体に施している。重弧文は把手にも付されており、胴部から連続して描かれたことがわかる。共伴する遺物が不明であるため時期の比定は難しいが、直線文と重弧文からなる文様構成は免田式土器と共通する点が多く、4段階以降に位置づけられる可能性が高い。

4-3 段階ごとの特徴・画期

ここまで検討してきた各段階が、どの様に次の段階へ変化していくのかを簡単にまとめてみたい。

1段階→2段階

甕B類や凸レンズ状丸底をもつ壺など、中期的な様相の強い段階から徐々に後期的な様相を強めるようになる。しかし、一部ではまだ中期的な特徴を残す。

2段階→3段階

甕B類が主体で、わずかにC類を含むようになる。また、壺はすべて凸レンズ状丸底または丸底となり、中期的な特徴は消失する。高杯や脚付無頸壺といった土器が精製器種として存在するなかで、ジョッキ形土器が成立する。

3段階→4段階

本遺跡の活動がもっとも盛んになった時期である。甕の長脚化が活発になり、粗略化も進む。また、高杯の外周調整も簡略化される。一方で、長頸の壺類は櫛描き文による装飾が盛んになる。さらに、小型尖底土器や片口土器など新たな器種が成立し、多様化する。

4段階→5段階

甕は長脚となり、調整の粗略化もますます進む。それに対して、複合口縁壺が多様化、丹塗りを施す長頸壺の出現など壺系土器の器種分化も進んでいる。

上述したような段階ごとの変化をみると、2つの画期を指摘できる。最初の画期は、中期的な土器から後期的な土器へと移行し終わった2段階から3段階が当てはまる。続いて、精製土器、とくに供膳に関する器種に変化がみられる3段階から4段階へと変わる時期を、第2の画期とすることができる。なお、下扇原遺跡1区SB4の土器は、3段階の特徴が強いが、一部に4段階の特徴をもつ土器が含まれる。これは、SB4が変化の起こり始めた時期にあたる可能性を示唆している。また、4段階で免田式土器や安国寺式土器といった他地域の土器が出現することは、球磨川地域や東九州との交流を示唆している。精製器種の変化の背景に、他地域からの影響があった可能性も考えられる。

5 土器の編年的位置

最後に、これまでに検討したそれぞれの段階が、阿

蘇谷における弥生時代後期土器のどの時期に該当するのかを検討する。

阿蘇谷地域における弥生時代後期の土器編年の先行研究として、下山西遺跡と狩尾遺跡群の報告書が挙げられる（高谷1987、木崎1993）。今回は、狩尾遺跡群における編年と対比する。

狩尾遺跡群の弥生時代後期の土器編年（以下、「狩尾編年」と記す。）は、甕の形態変化を基本として第Ⅰ期から第Ⅴ期までの5期を設定している。第Ⅰ期の甕は胴部最大径が上位に位置し、ナデによる調整を行うもの（本論におけるA類）が主体である。第Ⅱ期は、A類の甕に、胴部が長胴化し短い脚がつく甕（B類）が加わる。第Ⅲ期は短脚のもの、長脚のもの（C類）、脚台が欠けた後に再加工して使用するもの、という3種の甕が用いられる時期である。第Ⅳ期は、長い脚台の付く甕と丸底の甕がみられ、その外面の調整でタタキ目が残されるものもみられ始める時期である。第Ⅴ期は丸底が多く、胴部上半などにタタキが残されることの多くなる時期である。

これらの特徴から、狩尾編年の各期と今回の編年と対照すると、Tab.6-2のとおりである。

今回の編年では、狩尾編年における第Ⅱ期を細分した結果となった。なお、小野原A遺跡から、完全に丸底化した甕がみついているが、竪穴住居跡などの遺構に伴うものではなく、またその数も少ない。これらのことから判断して、小野原遺跡群の土器は、狩尾遺跡群における第Ⅰ期から第Ⅳ期の前半段階までに収まるものと判断される。

なお、各遺構の所属時期を取り纏めると、Tab.6-3のとおりとなる。△を付した遺構は、その段階に所

属する可能性がある、という意味である。

おわりに

狩尾編年では、資料数の制約により、第Ⅰ期と第Ⅱ期における土器群の詳細は不明な点が多かった。今回の編年により、その全てではないが、一部を補うことが出来たのではないかと思う。本来ならば、今回の成果と先行研究による成果を合わせて阿蘇谷地域における後期土器の編年を考えるべきであろう。しかしながら、現状、筆者の力量ではそこまで行うことは出来ないため、今回は小野原遺跡群における弥生時代後期の土器編年案を示すことで今後の研究への手がかりとしたい。

参考文献

- 河森一浩，1998，「免田式土器の再検討 - 様式構造をめぐって」『肥後考古』11，肥後考古学会
- 木崎康弘編，1993，『狩尾遺跡群』熊本県文化財調査報告第131集，熊本県教育委員会
- 木崎康弘編，1996，『蒲生・上の原遺跡』熊本県文化財調査報告書第158集，熊本県教育委員会
- 島津義昭，1983，「阿蘇の先史時代」『えとのす』22，新日本教育図書株式会社
- 高木正文，1979，「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』6，九州古文化研究会
- 高谷和生編，1987，『下山西遺跡』熊本県文化財調査報告第88集，熊本県教育委員会
- 武末純一，1982「北九州における弥生時代の複合口縁壺」『森貞次郎博士古稀記念論文集，古文化論集』下，森貞次郎博士古稀記念論文集，古文化論集刊行会
- 西健一郎，1983，「黒髪式土器の基礎的研究」『古文化談叢』12，九州古文化研究会
- 東和幸，2006，「南九州地域の龍」『原子絵画の研究，論考編』，六一書房
- 宮崎敬士，2001，「所謂免田式土器の再吟味 - 免田式土器様式研究の前に - 」『久保和士君追悼考古論文集』久保和士君追悼考古論文集刊行会

Tab.6-2 編年対照表

狩尾編年	本編年
第Ⅰ期	1段階
第Ⅱ期	2段階
	3段階
第Ⅲ期	4段階
第Ⅳ期	5段階
	—
第Ⅴ期	—

Tab.6-3 遺構編年表

段階	下扇原遺跡	小野原 A 遺跡
1 段階		SB16、SB21、SB96、SK192、 SB76、SB79、SK131、SB3515
2 段階	SB150 SB161 △	SB57
2 → 3	SB52、SB159	
3 段階	SB4、SB22、SB30、SB59、SB90、SK93、 SB163 SB50 △、SB156 △、SB166 △	
4 段階	SB1、SB3、SB7、SB11、SB18、SB19、 SB28、SB29、SK31、SK34、SB48、 SB83、SB84、SB86、SB85、SB91、SD87、 SB108、SB113、SB119、SB152、SB158、 SB164、SB165 SB5 △、SB6 △、SB9 △、SB20 △、SK32 △、 SB47 △、SB114 △、SB116 △、SB117 △、 SB168 △	
4 → 5	SK33、SB81、SB89	
5 段階	SB2、SB17、SB45、SB56、SB110 SK65 △、SB95 △	SB222、SB1217 SB3001 △

